

ペーター・ケルン教授講演会  
Prof. Dr. Peter Kern (Universität Bonn)  
Fortuna/Occasio/Sælde:  
Glücksvorstellungen in Texten und Bildzeugnissen  
des Mittelalters und der frühen Neuzeit

石井道子

2005年10月1日、ボン大学教授ケルン博士による招待講演が行われた。ケルン教授の専門領域は12・13世紀のドイツ文学、文献学・図像学。本講演もボエティウス『哲学の慰め』、ラインマル・フォン・ツヴェター他の中世ドイツ文学作品からのテキスト引用とともに多数のミニアチュール、版画のスライドを交え、中世ヨーロッパの「幸福観」を考える上で大変興味深いものだった。

運命の女神 Fortuna は運命の輪をあやつっている。この女神は絶頂期の人間をいずれは奈落へと落とし、また失意の人間を救い出す、気まぐれな存在である。(カール・オルフ『カルミナ・ブラーナ』でおなじみの姿である。)他方で、運命に翻弄される人間を助ける知恵の女神 Sapientia、また先見の女神 Providentia の存在があった。人間に深慮を教え、世界に秩序をもたらすのは彼女たちである。また、ギリシア神話の神カイロスに由来する女神 Occasio も、好機の擬人化として描かれた。彼女の前髪を素早く掴まないと、たちまちチャンスは逃げていく。これらの女神たちが司る幸運は、あくまでも運命的な、つまり、有無を言わず、人間に降りかかってしまう運命であるが、自分自身の努力によって手に入れる幸福 Sælde も、とりわけ騎士文学においては重要視されていた。この姿は騎士物語において、主人公たちの運命を担う *vrô sælde* という擬人化された女性としても描かれている。

講演後の質疑応答の中で、日本人聴衆の誰もが思い出したであろう、「禍福はあざなえる縄の如し」という慣用句(『史記』に由来する)が言及された。女神が輪を回すと運命が正反対になってしまう、という人生観は我々の持つ人生訓に相通じるところがある。思うようにならない人生をどう納得して生きていくか、そのための知恵を求めていた姿は時代も文化圏も超え、容易に想像がつく。中世ドイツの人々も、同じように悩んでいたというわけだ。

また、興味深いのは、宮廷文芸に明らかなように、キリスト教的倫理観によって秩序と価値観の統一を図ろうとしていた中世ドイツにあって、女神たちの姿が脈々と引き継がれていったことであろう。この異教的な運命の女神たちは不確かな現実を生きる人々の実感に合っていた。そして、人々の世界観から捨てられることも、他の存在に取って代わられることもなかったのである。